國學院大學学術情報リポジトリ

神道研究の国際的ネットワーク形成：神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」 公開日: 2024-06-25 キーワード (Ja): 170.4, 神道‖シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, 魯, 成煥, 色, 音, テーウェン, マーク, ブリーン, ジョン, ベンテリー, ジョン, ナカイ, ケイト, ヘイヴンズ, ノルマン, 遠藤, 潤, 平藤, 喜久子, 武井, 順介, シッケタンツ, エリック, 加藤, 里美, 加瀬, 直弥, 松本, 久史, 真田, 治子, 稲場, 圭信, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000506

第５回国際シンポジウム

神道研究の国際的ネットワーク形成

（国際シンポジウム）

開会の挨拶

井上順孝（実行委員長）

【井上】　おはようございます。これから第５回の国際シンポジウムを開催させていただきます。

2002年秋にＣＯＥが始まりまして以来、我々はＣＯＥの業務に毎日追われているという感じでした。本年はＣＯＥの最終年度に当たりますが、今回の国際シンポジウムで５回を数えます。初年度に第１回を行いまして、今回が第５回ということになります。毎年１回、それにミニシンポジウムを１回行いましたので、実際は６回目になるのですが、我々はそのようなことを重ねてまいりました。初めて参加される方もいらっしゃるとおもいますので、まずはこれまでの経緯と本日のシンポジウムがどういう目的のもと開催にいたったか、ということを簡単にご説明しまして、そして発題に入っていただくということにいたしたいと思います。

国際シンポジウムは2003年３月から始めました。振り返ってみますと、この2003年というのは３回、シンポジウムをやっているのですね。３月と９月と 12 月とやりました。それから2004年、2005年、そして今回ということでございます。2003年３月に行いました第１回目のシンポジウムは「各国における神道研究の現状と課題」というテーマで開催しました。テーマの通り、各国の神道研究者にお集まりいただきまして、百周年記念館のなかの、今はもう無くなってしまいましたが、視聴覚教室でやりました。そこでは、国外における神道研究者の少なさとか、国内外研究者の国際的交流の無さというものが改めて確認されたような発題が印象的でした。これをどう改善していくかということは、参加者全員がそのときにそれぞれ考えたことであります。残念ながら、そのときの発題者のお一人であったブレーメンさんはお亡くなりになりました。今から思えば、そのときが我々がブレーメンさんに会った最後ということになってしまったのでした。さて、その報告書は、皆さんのお手元にあるかと思います。まだの方にはお渡ししたいとは思います。もしかするともう残部がないかもしれませんが、ＣＯＥのホームページ上ではＰＤＦになっていますので、オンラインで見ることができます。

第２回目のシンポジウムは2003年９月に「〈神道〉はどう翻訳されているか」というテーマでやりました。今日、おみえのベンテリーさんにもこのときに来ていただき、ナカイ先生には司会をお願いしました。これも古い建物の中の会議室でやりました。そこでは神道古典とか、国学など、いろいろと話し合いました。そして、この年には 12 月に、近現代の神道について、翻訳上の問題点などを話し合いました。このときは、ベルトンさんとプロールさんというフランス、ドイツの方に来ていただいたのですが、その２回を合わせて１冊の本にまとめました。それに関しては今日も話題になるかと思いますが、今進行中の『神道事典』の改訂英訳、これのオンラインバージョンをつくるという作業をにらんで、そのような試みをしました。非常に問題がいっぱい出てきましたが、やってよかったなと

我々は感じました。

その後、神道の定義ということではないのですが、どうも神道という言葉自体が、日本国内の研究者と国外の研究者で少しずれがあるのではないかと考えるようになりました。簡単に言いますと、日本人の場合には、神道というのはある程度所与の信仰というか、宗教体系と考える傾向があるのに対して、国外の研究者の場合には必ずしもそうではないということです。近世につくられたもの、あるいは場合によっては近代につくられたものというような、その都度新たに確立された伝統というような扱い方をしているふしがあったり、あるいは連続していても非連続の部分がある、といいますか、相当に大きなギャップを含んでいる信仰形態であるというとらえ方があったりしているようでした。それをめぐりまして、またいろいろ議論をやりました。これは問題が大きかったせいか、さらに新たな問題が逆に出てくるという結果になりましたが、これも現在の神道研究に対する課題というものを我々は得ることができたと感じております。これは120周年2号館の広い教室でやりました。これも1冊の本として『神道の連続と非連続』という本になっております。

昨年から、オンラインといいますか、ネット上で情報を公開していくことが本格化してまいりました。つまり、翻訳からアップロードの段階になってまいりましたので、それを意識しまして、では一体、このオンラインを利用して、神道の情報を発信していくときに、それが教育とか研究にどのような影響を与えるのか。逆に、そういうことを考えると、どのような情報が必要になってくるのか、というようなことを議論いたしました。このときにも、いろいろな方にご参加いただきまして、120周年記念館1号館の新しい教室でやりました。このときも、かなりいろいろな課題といいますか、要望を与えられたと思いました。これも1冊の本にまとまっております。

このような経緯がありまして、今回のシンポジウムになったわけでございます。このシ

ンポジウムはＣＯＥの５年間の総括という意味を持ちます。このＣＯＥというのは、事業を５年間やって、それで終わりというわけではなく、そこで何が構築されたか、それをもとにして今後何を展開できるかということを示さなければいけない、そういうプログラムでございます。そこで我々の大学としては、国際シンポジウムだけではなくて、いろいろなメンバーが、様々なことをやっているわけですが、その成果を学術メディアセンターを中心に発信していこうと考えています。学術メディアセンターといいますのは、２年後の2008年（平成20年）の春に、かつて常磐松２号館とか、３号館という校舎があったところに完成を予定しています。単に建物をつくるというだけではなくて、ＣＯＥで築いたさまざまな研究成果、あるいは研究のシステム、そういったものを十分生かしていけるように考えて作っております。そこでは、デジタルミュージアムという発想、これは後で自分の発題のときに詳しく申し上げますが、そういうものとか、さまざまな研究発信のやり方、相互交流ということを行う予定でございます。

そういうことを見据えて、今回のシンポジウムでは、神道研究を外に開いていくと言うと変に聞こえるかもしれませんが、いろいろな国の方々と共同してやっていく上で、どういったことを具体的に考えたらいいのかということを議論したいと思っています。ですので、あまりに理念先行というか、あったらいいなという程度の願望ではなく、むしろ現実を見据えた目標あるいは仕組みというものをいろいろ提起していただいて、その中で何か１つ２つでもできるものから手をつけていこうと考えております。それを練っていくためのシンポジウムと我々としては捉えております。

私個人が国学院におりましてつくづく感じており、かつ非常に残念なことなのですが、神道研究者のかなりの人は国際的な研究動向にあまり注意を払わないというところがあります。端的に言えば英語文献を読まないということです。そう言ってしまうと身も蓋もないのですが、実際に現在では、国外で非常にレベルの高い神道研究がどんどんなされております。そういうことに目をつぶって、日本の神道研究というものが展開するというのは、私には考えられません。やはり国際的な場で、しっかりと自分たちの研究の成果を発表していくことが重要だと思います。そのためには海外で何をやっているかということも知らなければならない。しかし、言葉のハンディというのはなかなか克服が難しいと思います。これも後で申しますが、何とかそれを手助けするというか、翻訳の場を設けるなど、少しでも風通しがよくなるようになればと、思っております。

そういうこともございますので、今日はいろいろな国の方々から、具体的なお話を提起していただいて、忌憚なく意見交換ということでやりたいと思っています。30分の発題と20分の質疑応答というセッションを重ねていきますので、許された時間の中で、お互いの意思の疎通というものをよくしていただいて、形だけではなく、今後につながるものになればというのが我々が願っているところでございます。

簡単ではございますが、以上の趣旨説明を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。